

大学院合格編

人間健康学部 スポーツ健康学科 4年生

川原 也歩

(鳴門教育大学大学院学校教育研究科(修士課程)
人間教育専攻 グローバル教育コース)
(徳島県立城東高等学校出身)

私が、大学院を目指したのは3年次の10月ごろで、同時に教員採用試験の勉強を始めた時期でした。教職は、現場経験が最も大切であることを教育実習で学びましたが、さらに多様な知識や技術を身につけたいと考えたため、進学を決めました。

私は保健体育の免許を取得しましたが、教育学の修士課程と小学校の免許を取るために、3年間大学院に通います。この時間で、より深い経験やグローバルな考え方を学び、人脈を広げたいと考えています。後輩の皆さんへ、今は将来の選択に悩んでいる時期だと思います。今までの経験を役立てるのも、これから新しいことにチャレンジすることも、素晴らしい選択のひとつだと思います。これから、大学の課題や実習に追われるとは思いますが、必死に努力し続けてください。



国際学群 語学教育専攻 4年生

木内 希

(上越教育大学大学院 発達支援教育実践研究コース)
(茨城県取手聖徳女子高等学校出身)

私は元々英語教師を志していましたが、本大学において「教育」について学ぶ過程で、特別支援教育と小学校英語教育に興味を持つようになりました。上越教育大学院ではこれら2つの免許状の取得が可能であり、特に、小学校教員を志す私にとって、その夢を実現させる最善の場所であると考えました。加えて教職大学院では、多様な専門の現職教員の方々と学生と共に学ぶ機会にも恵まれているため、教員としての専門性を高めることができると期待しており、その点も大学院進学の大きな決断理由の一つでした。

試験科目は新型コロナウイルスの影響で、オンラインによる面接のみに変更になりました。主な試験対策として、一つに自身の卒業論文のテーマである特別支援教育に関する基本的な知識を説明できるようにしておくこと、二つに教育時事や過去に出題された問いに対する自身の考えを持つことに尽力しました。これからの時間を大切に、素敵な教員になれるよう日々自己研鑽に努めて参ります。



人間健康学部 スポーツ健康学科 4年生

山口 健斗

(福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻)
(博多学園博多高等学校出身)

私が教職大学院を目指したのは4年次の8月で、教員採用試験に不合格となった直後でした。実際に不合格となって改めて自分の将来を想像したときに講師として働きながら合格を目指すことに不安があったこと、もっと教育について深く学びたいと感じたことがきっかけで教職大学院の進学について濱本先生や教職大学院に通っている先輩方に相談し、進学を決意しました。教職大学院では、授業で学んだことを実習校で活かす「理論と実践の往還」によって学部段階よりもさらに専門性を高めることができます。他にも、現職教員の方から現場のリアルな経験を聞くことができる、ゆとりをもって採用試験の勉強をすることができる、校種や科目を超えた様々な人が集まるため幅広い人脈を作ることができるといった多くのメリットがあります。

試験科目は論作文、面接、集団討議の3つでした。論作文や集団討議の対策としては主に教職に関する専門的な知識について勉強しました。キーワードを言われ、自分の言葉で説明できるようになるくらいまで暗記するのではなく理解するようにして勉強しました。面接に関しては濱本先生に相談し、面接対策をして頂きました。いずれも勉強したことは現場に立った際に必ず活かされるものであるため、試験勉強という意識ではなく、自分の教師としての資質能力を高めているという意識で勉強すると実践力が身につくより良い勉強になると思います。

大学での勉強や私生活と両立しながらの対策はストレスにもなり大変だとは思いますが、時には周りに頼りながら無理せずに頑張ってください。応援しています。



その他編

国際学群 語学教育専攻 4年生

佐々木 善基 (琉球大学教育学部特別支援教育課程) (北海道登別明日中等教育学校出身)

私は大学在学中に編入学や通信制大学での免許取得の道も考えていました。ただ、自分の今行っている活動が将来の財産になることを信じ、卒業後に小学校の免許や特別支援教育の免許の追加取得を目指すことにしました。

私の進学先では1年で特別支援教育の免許を追加取得出来ます。試験は面接と小論文形式の記述試験でした。試験勉強は教職教養レベルの特別支援教育の知識を身につけていれば問題ないと思います。

免許を取得する上で様々な選択肢があっていいと思います。後輩の皆さん夢を諦めず頑張ってください。

教員養成支援センター

だより

第31号

2022年4月1日発行
編集・発行：名桜大学教員養成支援センター
所在地：沖縄県名護市宇留又1220-1

Society5.0を実現するための教育構想を「批判的」に読み解く

GIGAスクール構想（以下、GIGAと略す）は、コロナ禍において教育におけるICT活用を推進し、さらには、その後の教育の希望であるかのように語られ、もてはやされているように私にはみえます。果たして、そうなのでしょうか？この点を、「批判的」に考えてみましょう。

そもそも、GIGAは、国家による未来社会構想戦略であるSociety5.0を実現するための「人材」育成を進める基盤整備的な側面をもち、内閣府の「安心と成長の未来を拓く総合経済対策」の一環として2019年12月に打ち出され、「消費税率引き上げ後の景気の落ち込みへの、政府レベルでのテコ入れ策」であったと評されています。また、GIGAを基盤とするSociety5.0型社会における教育は、「最新テクノロジーを駆使した教育サービスが商品として提供される『市場』として、民間企業に大胆に開放される」ことになると思われます〔児美川 2022〕。こうしたSociety5.0に向けた教育改革の一例として、2018年から始まった経済産業省の「未来の教室」事業があります。この事業では、「学びの個別最適化」と「STEAM教育」（「STEAM教育」とは、S=Science,T=Technology,E=Engineering,A=Art,M=Mathematicを組み合わせて、探求的に学ぶ教育だとされています）を推進するとされています。そして、「学びの個別最適化」には、教育産業（予備校・塾等）とIT企業が連携して開発されるAIドリルが活用されます。一方、「STEAM教育」において用いる教育内容（教材等）は、企業・地方自治体・大学等が連携して開発されます。つまり、「未来の教室」事業も、教育が民間企業等に開放されることが前提なのです。

このようにみえてくると、Society5.0を実現するため教育構想は、公教育を民間企業等に開放し「市場」化することによって、その公共性をやせ細らせ、理念である教育機会の平等等を切り崩していく危険性を内包するものだと考えま

す。これが、社会関係レベルから考える第一点目の筆者の危惧です。

第二点目は、個人レベル・人間関係レベルから筆者が考える危惧であり、AIドリルによる「学びの個別最適化」の行きつく先の見通しについてです。AIドリルによる「学びの個別最適化」を突き詰めていったならば、教室で仲間とともに学ぶ必要はなくなるという可能性は十分にあります。それは、仲間と議論する中で、多様な考え方にふれ、それを吟味し、自分のものとしていく中での学びの「深まり」等が捨象される危険性があるということです。また、AIの指示や支援が重要なのであり、教師さえも必要なくなるかもしれません。さらには、学習意欲が形成されていないために、AIドリルによる「学びの個別最適化」についていけない子どもが現れることは容易に想像できますが、それは「自己責任」化され、ついていくことが「できる子ども／できない子ども」の間に新たな学力の格差を生み出すでしょう。これもまた、公教育の理念である教育機会の平等等を現実的に切り崩していくことになります。

つまり、Society5.0を実現するため教育構想は、公教育を弱体化させる危険性をはらんでいるということです。

しかし、GIGAやSociety5.0を実現するため教育構想を全否定することは、現実的ではないです。すし、ICTを活用した教育のメリットも確かにあります。上述した危惧を、教師をはじめとした教育関係者が認識した上で、「子どもたちの成長にICTを活用した教育をいかにつなげていくのか」を構想していく力量が、今後の教育関係者、特に教師には必要であろうと、私は考えています。

国際学群語学教育専攻 教授
板山 勝樹

国際学群 語学教育専攻 4年生

金崎 永幸（中学校英語教諭（福岡県））（福岡県立三池高等学校出身）

「やっとスタートラインに立つことができた」、合格の通知を受けた際に真っ先に出てきた感情です。字数に限りがありますが、教員採用試験を数ヶ月後に控えた方々にとって、本稿がなにがしかの手助けとなることを期して執筆致します。

私が教員を志した理由は、学校を子どもたちが安心して・笑顔で生活できる場にしたいと考えたためです。私にとって教員採用試験はあくまで通過点であり、常に「試験のその先（学校現場）」を見据えて、大学での模擬授業や教育実習等に一心不乱に取り組めました。二次試験においては、それらの取り組みの成果を十分に発揮することが出来たと自負しております。

私にとっての板山先生がそうであるように、ロールモデルの存在がきっとあなたの取り組みを後押ししてくれることと思います。試験まで残りわずかかと思いますが、なぜ教員を志したのか、どのような教員になりたいのか、今一度自分自身と対話してみてください。皆さんの取り組みを学校現場から応援しています。



人間健康学部 スポーツ健康学科 4年生

井上 陽（小学校教諭（熊本県））（熊本国府高等学校出身）

私は、令和4年度熊本県公立教員採用試験で小学校を受験し、合格することができました。私は大学2年次の後学期から、通信制大学に入学し小学校教諭免許の取得を目指し学習を始めました。名桜大学の講義や部活動との両立は大変でしたが、夢を叶えるための勉強だったので頑張ることができたのだと思います。

教科科目の講義や採用試験の勉強はとても大変ですが、たくさんの仲間がいます。受験する校種、県が違えど、一緒に頑張っているという気持ちだけで自分のやる気に繋がります。

「明日やろうは馬鹿野郎」という言葉があるように、今頑張ることができない人は受験にも勝てないと思います。絶対合格するという強い気持ちをもって、今この瞬間を頑張ることが大切だと思います。ぜひ諦めずに頑張ってください。応援しています。



人間健康学部 スポーツ健康学科 4年生

外間 美乃里（養護教諭（沖縄県））（沖縄県立小禄高等学校出身）

私は、令和3年度沖縄県教員採用試験で養護教諭を受験し、合格することができました。大学3年生の10月頃から北部教員養成講座に参加し、本格的に試験勉強を始めました。新型コロナウイルスの影響で講座がオンラインやハイブリットになったり、試験日が変更になったり等、不安なことがたくさんありました。私は友達と一緒に勉強したり、ご飯に行ったり、家族と電話をしたり等、自分なりのリフレッシュ方法を見つけて乗り越えました。

2次試験でも北部教員養成講座に参加し、面接練習と模擬授業の練習をしました。講座に参加している人たちはみんな堂々としていて、とても良い刺激を受けました。2次試験の練習は、一人ではなく友人や同じ仲間と練習することが大切だということもわかりました。

1次試験から2次試験まで対策してくださった方々のおかげで、本番では最後まで諦めずに頑張ることができました。とても感謝しています。

これから受験を控えているみなさん、体調に気をつけて自分に合ったペースで頑張ってください。頑張ってください。応援しています。



人間健康学部 スポーツ健康学科 4年生

林 照越（中学校保健体育教諭（福岡県））（福岡県立光陵高等学校出身）

令和4年度福岡市教員採用試験に合格し、中学校保健体育教諭として採用されました。林照越と申します。今回私が教員採用試験に合格することができたのは、ひとえに濱本先生や神田先生のご指導、そして教員養成支援センターの皆様のサポートのおかげだと思っています。本当にありがとうございました。教員採用試験に向けて勉強を進める中で私は、何事においても計画性と分析が重要だと感じました。大学生という貴重な時間をどのように使うかは人それぞれだと思いますが、これから先の人生を自分のやりたい仕事で生活ができるというのはとても喜ばしいことだと思います。なるべく少ない後悔でこれからを過ごせるように今やるべきことをやるのがいいのではないかと私は思います。皆さんの学生生活が実りあるものになることを心からお祈りします。

先生方、教員養成支援センターの皆様、本当にお世話になりました。



人間健康学部 スポーツ健康学科 4年生

太田 小雪
（上越教育大学大学院 学校教育研究科・教育実践高度化専攻 学校教育実践研究コース（学級経営・授業経営領域））
（滋賀県立高島高等学校出身）

小学校教員免許を取得したい・確固たる自信を持って教育に携わりたいという思いから、大学3年次半ばより教職大学院を志望しました。

私が受験した上越教育大学院は名桜大学の提携校のため、入学試験は志望動機書等書類の提出と面接のみでした。そのため、試験対策では先生方の助言を仰ぎつつ「自分の志す教員像」「そのために教職大学院では何をしたいのか」を徹底的に突き詰めることに専念しました。

「どのような教員になり、何をしたいのか。」ぜひ、あなた自身にも問いかけてみてください。



人間健康学部 スポーツ健康学科 4年生

高島 諄
（福岡教育大学教職大学院教育実践力開発コース 中等教科教育高度実践力プログラム）
（沖縄県立コザ高等学校出身）

私は多くの方々に支えられ、福岡教育大学教職大学院教育実践力開発コース中等教育高度実践力プログラムへ進学することができました。

私が、進学を希望したきっかけは、大学講義の模擬授業の中で、教えることや教材研究の楽しさを感じ、将来「生徒に分かりやすく楽しく学べる授業」を展開したいと考えたからです。進学先では、名桜大学で身に着けた主体性を基に教育について研究し、沖縄県の教育に良い影響を与えられるよう精一杯頑張ります。

最後に、これまでご多忙にも関わらず、ご指導いただいた先生方に深く感謝申し上げます。



人間健康学部 スポーツ健康学科 4年生

石原 稜也
（兵庫教育大学院 教職大学院教育実践高度化専攻）
（佐々木学園鶯谷高等学校出身）

学級経営や生徒指導についてしっかりと学びたいと考え大学院進学を決意しました。試験内容は、事前課題とオンラインでの面接、口述試験でした。

進学にあたって、大学院では何を学ぶことができるのか調べるのが重要だと考えます。コロナ禍の影響でオンラインでの説明会が増えているので自宅から簡単に参加することができます。自分も興味のある大学院説明会にかたっぱしから参加し、進学して学びたいと思う大学院を選択しました。

将来働きたい土地の院に進学し、地域の特徴を学ぶことや人脈を広げることも大切だと思いますが、自分がさらに追究したいことを今までと全く違った土地で学ぶことも有意義な経験と多くの学びにつながると思います。



人間健康学部 スポーツ健康学科 4年生

宮本 聖紀
（福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻）
（福岡県八幡高等学校出身）

私が大学院進学を決めて勉強を行なったタイミングは、福岡県の教員採用試験を受けて、不合格になった8月頃からでした。最初の頃は、自分自身で大学院の勉強を行っていました。そのため、9月に受けたいくつかの大学院の試験に合格することができませんでした。そこから、濱本先生にご相談し指導をしていただき、論文や面接の対策を十分に行うことができ合格を勝ち取ることができました。

後輩の皆さんには、最後まで進路を諦めないことと信頼できる先生にご支援していただき合格を目指して欲しいです。



人間健康学部 スポーツ健康学科 4年生

杉山 蘭
（上越教育大学大学院教育支援高度化専攻心理臨床研究コース）
（青森県立三本木高等学校出身）

当初、養護教諭を志していましたが、学ぶにつれて人の心について深く学びたいという想が強くなっていました。ギリギリまで進路を悩んでいましたが、挑戦せずに諦めたくはないと思い8月下旬に受験することを決めました。

出願が9月中旬だったので、急ピッチで準備をしました。ご指導くださった先生方には本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

現時点では、臨床心理士を目指しています。進路についてたくさん悩みましたが、悩んだからこそ納得のいく選択ができました。



人間健康学部 スポーツ健康学科 4年生

藤井 由希希
（上越教育大学教職大学院 学校教育研究科・教育実践高度化専攻 学校教育実践研究コース 学級経営・授業経営領域）
（春日部女子高等学校出身）

「教師になりたい」という漠然とした考えから教職をとっていましたが、名桜での学びの中で「学童期の子どもたちに関わりたい」と考えはじめ、小学校教員免許の取得を決めました。先生方や先輩方とのお話の中から、上越教育大学教職大学院の存在を知り、自身の理想の教師像と上越の教師像や教育に関する考え方が一致していると思い、上越に進学を決めました。試験は、志望理由等の書類の提出と面接のみでした。先生方のご指導の下、明確な志望理由や教師像、なぜ上越で学びたいのかを整理しました。深く感謝しております。

残りの1年、自分がすべきことは何か明確に優先順位を設けて頑張ってください。応援しています。

